

(4)高知市での専門工場の設立

1944年7月、高知市旭町3丁目94番地に科学加工紙株式会社を設立され、風船爆弾の気球の製造に着手した。¹ここは、かつて輸出和紙株式会社があった所である。新しい会社は、東京・蒲田の国産科学工業株式会社の子会社だった。

写真3 風船爆弾づくりの専門工場・科学加工紙株式会社(高知市旭)



(出所) 同工場近くに住んでいた島総一郎氏の記憶をもとに、ここに動員されていた吉井久子氏が描いたもの(平和資料館・草の家所蔵)

路面電車通りに面して北にあった同社に、風船爆弾の気球の満球試験工場が建設された。木造で、天井の高さは10メートル以上。この中で直径10メートルの紙風船8個を一度に膨らませて空気もれがおきないか調べるスペースが必要だったからだ。

同社の西、すぐ隣の所に住んでいた旭国民学校4年生の島総一郎氏が。小説『黒煙突』²で、この工場のことをえがいている。

大通り沿いの広い敷地に、事務所や荷造り場や倉庫が立ちならび、浅く水をはったコウゾを浸すコンクリートの池もいくつかあった。小川を挟んだもう一つの敷地には、手漉(てす)きの工場や紙の乾燥場がとらなっていた。

夏休みに入ろうとしていた時、この製紙会社が長年つくってきた和紙のほかに何か別のものをつくり始めるといいうわさが流れた。工場の中に、直径2メートル、高さ50メートルほどの黒い煙突が建てられた。天辺には先のとがった避雷針がつけてあった。そして、

¹ 清水(1956),PP245-247

² 島「黒煙突」=猪野・岡林編(1997),P36-57

二棟並んで巨大な黒い建物が建った。近所の人々が「もうすぐ、会社の中へは立ち入り禁止になるらしいよ。(黒い建物の中で)大事な物を作るそうじゃ」と教えてくれた。

その建物の中で気球をつくって、爆弾を取り付けてアメリカまで飛ばすといううわさも聞こえてきた。

3か月ほどの東京での研修のあと、この工場に勤務した山岡茂太郎氏によると、ここで2000人もが働いていたという。高等女学校の生徒、高知市上新地の遊郭の女郎や中居もいた。生紙をはりあわせて原紙をつくり、気球の形に裁断した原紙をはりあわせて球体にしていく。

山岡茂太郎氏は「女学校の生徒さん達が、コンリヤク糊を毎日使うので手が荒れて困っていたということを聞きました。熱や炭酸ソーダなどの影響もあり、素手で張り合わせるので、手が腫れ上がって指紋が消えるという女学生もあったということです。」と書いている³。

この工場に動員された高知市の私立土佐女子高等学校の生徒だった秋沢淳子氏が、工場での作業のことを書いている⁴。

「工場の中は蒸気がみなぎり、その中で三角柱の鉄板の上に長方形の和紙を置く。コンリヤク糊を大きな羽毛でのばし、上下、左右に塗ると羽毛で鉄板を押し、ぐるんと廻り二面の鉄板が出て来る。同じく塗り廻し三面にもまた塗る。三角柱の中には熱い蒸気が通り、始めの一面の紙は乾燥しているので、はがし集積場に持って行く。バケツに糊を一杯入れ持って来ては繰り返して和紙に糊をつけ羽毛で鉄板を押し、押すのにも力を必要とし熱い鉄板が空廻りする。正位置に戻しては和紙に糊をぬるが、パンと張った厚い丈夫な紙が出来る。隣の部屋では大きな風船に仕上げてゆく。」

高知市の高知女子師範学校予科3年生たちも1944年11月～12月、同じ現場に動員されている。そのなかの一人・吉井久子氏(1927年生まれ)もが、当時のことを書いている⁵。

「工場の内部はガランとした部屋に鉄の三角柱があり、内部をスチーム管が通っていました。三角柱は長さ約一・八メートル、幅約〇・九メートルで、スチーム管は三角柱の中を通る部分に小さな穴が開き、紙を乾燥させる仕組みになっていました。

私たちは一つの部屋に五人が配置されました。仕事はバケツに入ったコンリヤク糊を刷毛につけ、幅約七十センチ、長さ約一メートル五十センチの白い紙を三角柱の面に貼つける仕事です。三角柱の三面に紙を貼ると最初に貼った紙は乾燥しているので、それををはがしてまた貼るといった単純な仕事でした。」

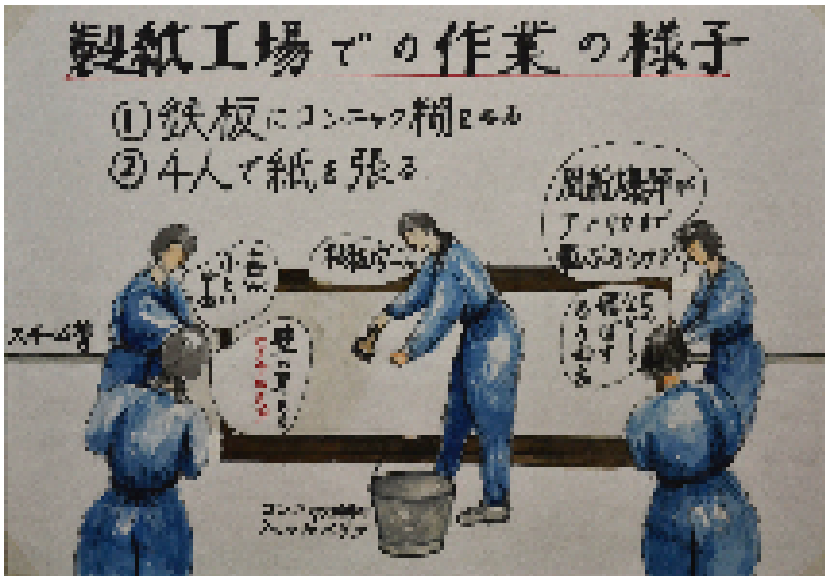
「日がたつにつれ、どこからか、『これは風船爆弾用の紙でアメリカへ飛ばすがや』と、ささやかれるようになりました。」

³ 山岡(2007年),P79-80

⁴ 秋沢「空襲」=『わが戦争体験の日々』編集委員会(2006),PP56-57

⁵ 吉井「愛知県半田市の中島飛行機での終戦」=戦争遺跡保存ネットワーク高知(2010.6),pp12-23

写真 4 科学加工紙株式会社での高知女子師範学校予科 3 年生たちの作業



(出所)吉井久子氏が描いたもの = 平和資料館・草の家蔵

1944年4月に私立土佐女子高等学校3年生になった西川和代氏も原紙を気球に組み立てる部署に動員され「全身全霊をあげてフィ作業に従事した。」という⁶。

「裁断した細長い紙の一片に八人ぐらい並んで座り、その上にもう一枚重ねて一センチメートルあまりの糊代に糊を付け、指先に全身の力をかけて左右に移動させ八人息を合わせて貼り合わせる。貼り終わったらかけ声をかけて前方にずらし、また一枚と次々貼り合わせて大きな風船気球を作り上げる、協同作業で、皆の呼吸が合わなければ完成しない。

くそ真面目なわたしは、指先が腫れて夜寝れないほど毎日毎日がんばった。」

(5) 伊野町の日本紙業株式会社伊野工場

伊野町内野(いまは、いの町)の日本紙業株式会社伊野工場も相当の量の生紙を生産したようだ(同工場は、いまは日本製紙パピリア株式会社高知工場)。同工場の工場史にそのことが書かれている。⁷

この工場は、大東亜戦争開始後の1942年に全面改築して運転を開始していた。当時は、規模の大きさと製品の優秀さで全国1、2位に位置する和紙工場で、陸軍需品本廠、海軍経理局の指定工場になっていたという。

「生紙の製造規格として軍より示されたものは、標準化の進んだもので現在から見ても誠に驚く程、微に入り細にわたったものであり、感を重んじ、紙の試験にしても殆ど[ほとんど]官能検査ばかりに頼っていた当時としては実に画期的な事であった。

⁶ 西川「土佐高女のころのフィ作業、空襲、疎開、終戦」=戦争遺跡保存ネットワーク高知(2010.1), pp1-9

⁷ 日本製紙パピリア株式会社高知工場(2003)

而[しこう]して生紙の良否は原料たる楮皮の剥皮の良否が重大な関係を有するので、その厳選の為に多くの人手を要したのであるが、当事[ママ]人不足の折とて、伊野工場では、佐川高等女学校生徒、伊野町小学校[当時は国民学校]、町婦人会員等多数を動員して之[これ]にあたらせた。」

佐川町の高知県立佐川高等女学校の生徒たちが「伊野町の製紙工場」で1944年9月からコウゾの皮そぎをやらされていた。同校の教員だった坂口知恵(旧姓・細木)が書いている。

8

仕事の内容はコウゾやミツマタの樹皮の、紙になる白い部分を取り出すことだった。コウゾ、ミツマタは、長時間蒸して柔らかくして、水びたしのまま、土間運ばれてくる。ゴムの前かけをした生徒は、それを1本ずつヒダの上に乗せ、右手に鋭い刃物をもって押しつけ、左手で強くひっぱりながらこそいでいく。「両手ともに相当な力をこめなければできない作業でした。同じ姿勢で同じ動作を繰り返しながら、やがて秋は深まり、水は容赦なく彼女らの体を冷やしました。」

「通い始めた頃は学習への意欲が旺盛で、教科書を持って工場に出掛け、時間があれば勉強していたのです。それが、ある日、はっと気が付いたのは、手に持っている本が教科書から雑誌の類にかわっていることでした。また、作業中の静けさにくらべて、休み時間のにぎやかさ、工員たちと仲良くなり、言葉使いがそっくり工員風になっていたのです。環境の影響も思いながら、やりきれない淋しさを感じたものです。」

(6)高知製紙株式会社伊野工場

前述の憲兵事件のあった高知製紙株式会社は、その後、陸軍航空本部の了解のもとに同社伊野工場で生紙の製造をし、巻き取りを関東に出荷しつづけた。「生紙の機械漉[す]きに成功したのは全国でも高知製紙ただ一社だったと聞く」と同社の河野楠一氏は書いている。

9

(7)高知県下の他の風船爆弾気球工場

ほかの工場も見ておく。

先にのべた高知市の徳平製紙工場には従業員が150人いて、おもに「インク止め」と呼ばれる事務用便せんや伝票類などの原紙を製造していた。それが軍需工場にさまがわりして高知県が手配した女子挺身隊員¹⁰40人ほども派遣されてきた。陸軍の要請は、寸法や強

⁸ 坂口「佐川高女の生徒と私」=自分史かわら版編集室(1988),P71-75

⁹ 河野(1992)、PP. 142 - 143

¹⁰ 女子挺身隊=女性の強制的勤労働員組織。1943年9月、国内態勢強化方策が閣議決定され、14~25歳の未婚・無職・不在学の女子を居住地で女子挺身隊に組織することになった。翌年3月から強制的になり、6月からは12歳にまで引き下げられた。8月には女子挺身勤労令が公布されて1年間の動員が義務づけられ、違反者には1年以下の懲役または1000円以下の罰金が科せられるようになった。

度の規格に厳しかった。「大判のサイズなら、そう、畳一枚ほどはあったでしょうか。繊維の流れる方向を縦と横、お互いに重ねるように張り合わす。これにはこんにゃくのりが、強力な接着剤として使われました」と徳平はいう。同工場では、日の丸の鉢巻きをしめた女子挺身隊員が昼夜交代でこんにゃくのりを紙にしみ込ませる作業が続いた。3枚、または5枚に張り合わせた原紙は、風雨に耐えるよう、さらにグリセリンで処理された。ときおり、サーベルを腰につけた陸軍の監督官が見回りに来た。¹¹

県下の南国市、安芸市の工場でも風船爆弾の製造を開始した。

南国市国府地区(旧・国府村。比江麿寺の近く)の城東製紙工場も、その一つ。

この工場については「手漉[てすき]和紙は、昭和十六年[一九四一年]原材料が配給制になったことなどで企業の合理化を図る必要から会社組織による操業が計画され、個人経営を行っていた工場のうち竹内馬喜、門脇達一、和泉馬治、和泉清馬各氏と旧久礼田村の大川勘之助、徳橋正治、久米茂治の各氏が合同して、城東製紙を設立し……」とある。同工場でも風船爆弾用紙の製造がおこなわれた。¹²

1943年はじめ、安芸郡井ノ口村(いまは安芸市井ノ口)に宮ノ上の小松俊良氏、山田部落の井上栄太郎氏、宮ノ上の小谷勝寛氏ほか数人の城東安芸製紙有限会社(小松俊良社長)ができた。1944年、同社は、陸軍から原紙の製造加工の注文を受けた。女子挺身隊10数人も同社に来てフル生産した。¹³ いま、いの町紙の博物館にある風船爆弾の原紙をつくった会社である。

「『昭和十九年に、役場からの話で、軍に和紙の貼り合せをして納めるという仕事が回されてきました。近在の和紙業者が合併して城東安芸製紙という会社が作られ、女子の挺身隊もたくさん集まって和紙の貼り合せをしていたようです。挺身隊の人々は近くのお寺に寝泊りしていました。それに関係していた同業者から聞いた話ですが、この仕事ではたくさん儲けさせてもらったと、皆いっていたそうです』

高知県安芸市で製紙工場を経営する小松光元[みつもと]の話である。¹⁴」

「高知で(風船爆弾製造の)監督班の解散記念写真を写したのは[一九四五年]三月二十四日である。¹⁵」

5、高知県下でつくられた風船爆弾の気球の行方

高知でつくられた紙の気球は、ラッカーで迷彩塗装をし、月に10 - 15個ずつ東京へ送られた。¹⁶

¹¹ 朝日新聞社高知支局(1986), PP110-111

¹² 西口「国府地区の製紙業について」= 南国史談会(1992) PP, 43-44

¹³ ふるさとの今昔をさぐる子供と若人と大人の会企画実行委員会(1986), PP150-155

¹⁴ 吉野(2000), P289

¹⁵ 吉野(2000), P263

¹⁶ 朝日新聞高知支局(1975), PP132-136

高知でつくった生紙の一部は、大阪城のすぐ北の大阪砲兵工廠^{（こっしやう）}、大阪陸軍造兵廠¹⁷に運ばれた。¹⁸

「一九四四年の九月ころから、大量の気球生紙が大阪造兵廠(砲兵工廠)に運ばれた。大阪城天守閣の北東、片町門の内側に巨大な倉庫群が林立していたが、ここに高知県産の和紙が次々に送り込まれていったのである。やがて、この和紙は大阪や四国から動員された女学生たちの手で気球に成型されていくことになる。」

ここでは、1944年12月7個、1945年1月120個、2月508個、3月400個、計1035個の風船爆弾の気球がつくられている。¹⁹

風船爆弾を発射(放球)するために千葉の気球連隊が母体となり「ふ」号作戦気球部隊が編制された。

連隊長・井上茂大佐。連隊本部・茨城県大津。総員・約2000人。連隊本部のほか、通信隊、気象隊、材料廠を持ち、放球3個大隊で編制された。

第1大隊(3個中隊)茨城県大津(現在の北茨城市五浦海岸一帯)

第2大隊(2個中隊)千葉県一宮

第3大隊(2個中隊)福島県勿来^{（なごま）}

1個中隊は2個小隊で構成され、1個小隊は3個発射分隊(発射台各1)を持つ。

中隊人員は、将校12-13人、下士官22-24人、兵約190人。大隊には水素ガスの充填、焼夷弾・爆弾等の運搬・装備を担当する段列中隊1個があった。

千葉県一宮には試射隊が置かれた。試射隊はラジオゾンデ装備の観測気球を放球し気象条件を探った。ほかに気球の行方を追う標定隊があり、宮城県岩沼に本部を置いた。実際の標定所は青森県古間木、宮城県岩沼、千葉県一宮の3カ所に設置された。後に樺太標定所が設置された。

水素ガスは横浜、川崎の昭和電工川崎工場で製造し、150気圧に圧縮してポンペに詰め、トラックや貨車で基地に輸送した。

同年10月25日、梅津美治郎参謀総長が井上茂気球聯隊長気球聯隊長に下した攻撃実施命令「軍事機密 大陸指第二千五百五十三号」は、つぎのようなものであった²⁰。

命令

- 一、米国内部攪乱[かくらん]ノ目的ヲ以テ米国内土ニ対シ特殊攻撃ヲ実施セントス
- 二、気球聯隊長ハ左記ニ準拠シ特殊攻撃ヲ準備スヘシ

¹⁷ 大阪砲兵工廠、大阪陸軍造兵廠 = 大日本帝国陸軍の兵器工廠(造兵廠)。大口徑の火砲を主体とする兵器の製造を担ったアジア最大の軍事工場。1945年8月ころの最大工員数は約6万4000人。

¹⁸ 吉野(2000),P137-138

¹⁹ 吉野(2000),P158-159

²⁰ 吉野(2000),PP204-208

(一) 実施期間八十一月初頭ヨリ明春三月迄[まで]ト予定スルモ状況ニ依[よ]リ之[これ]カ終了時期ヲ更[さら]ニ延長スルコトアリ

攻撃開始ハ概[おおむ]ネ十一月一日トス

但[ただ]シ十一月以前ニ於[お]イテモ气象観測ノ目的ヲ以[もつ]テ試射ヲ実施スルコトヲ得[う]試射ニ方リテハ実弾ヲ装着スルコトヲ得

(二) 投下物料ハ爆弾及ビ焼夷弾トシ其[その]概数左ノ如シ

十五キロ爆弾 約七五〇〇箇

五キロ焼夷弾 約三〇〇〇〇箇

十二キロ焼夷弾 約七五〇〇箇

(三) 放球数ハ約一五〇〇〇箇トシ月別放球標準概ネ左ノ如シ

十一月 約五〇〇箇トシ五日頃迄ノ放球数ヲ勉めて大ナラシム

十二月 約三五〇〇箇

一月 約四五〇〇箇

二月 約四五〇〇箇

三月 約二〇〇〇箇

放球数ハ更ニ約一〇〇〇箇増加スルコトアリ

(四) 放球実施ニ方リテハ气象判断ヲ適正ナラシメ以テ帝国領土並[なら]ニ「ソ」領ヘノ落下ヲ防止スルト共ニ米國本土到達率ヲ大ナラシムルニ勉ム

三、機密保持ニ関シテハ特ニ左記事項ニ留意スベシ

(一) 機密保持ノ主眼ハ特殊攻撃ニ関スル企画ヲ軍ノ内外ニ対シ秘匿スルニ在リ

(二) 陣地ノ諸施設ハ上空並ビニ海上ニ対シ極力遮断ス

(三) 放球ハ气象状況之ヲ許ス限り黎明薄暮及ビ夜間等ニ実施スルニ勉ム

(四) 今次特殊攻撃ヲ「富号試験」と称呼ス

攻撃開始は11月3日の明治節²¹が選ばれた。攻撃基地は、千葉県一宮、茨城県大津、福島県勿来の3か所だった。

勿来基地では、2日前、11月1日午前3時30分、大3大隊第2中隊第1小隊がバラック倉庫で風船爆弾の整備、点検に爆発事故がおり、小園信也一等兵ら3人が亡くなり、3人が重傷をおった。²²

11月3日の当日は午前3時より放球準備にかかり、午前5時、いっせいに発射した。

大津基地の第1大隊では、この日、風船爆弾の投下装置から爆弾が抜けおちて炸裂、鶴川清小隊長ら3人が死亡した。²³

この事故のため、この日の攻撃は、3基地とも途中でうちきった。

²¹ 明治節 = 毎年11月3日。昭和前期の祝祭日(休日)で、明治天皇の誕生日。

²² 鈴木(1980), pp.114 - 120

²³ 鈴木(1980), pp.124 - 130

11月7日、ふたたび攻撃を開始した。

1945年4月上旬までの発射総数は約9,000個であった。

1945年に入ると、アメリカ軍の日本本土空襲は激しくなった。

風船をふくらませるのに必要な水素の輸送も遅れがちとなり、水素を製造していた川崎市の昭和電工、気球を製作していた工場なども爆撃を受けるようになった。

放球について千葉県の一宮町史ふるさと郷土史研究会の長谷川英美氏が、つぎのように書いている。²⁴

「昭和19年〔1944年〕12月某日、午前6時半頃、七島踏切の手前までいくと、ちょうど海岸の松林のすぐ向こうに、気球がふわりと上がった。どンドン上がって天までいった。

田んぼ道を急いで歩いて駅に着いた。汽車がすぐきた。乗ってみると当然のように海側の窓は、鎧戸が降ろされていた。

この気球が風船爆弾で、一宮海岸は風船爆弾の基地になっていたのである。（中略）

風船爆弾の放球基地は、茨城県大津（18台）、千葉県一宮（12台）、福島県勿来（なこそ）（12台）である。（）内は放球台数。

放球台は直径10メートルの円型コンクリート床を作り、周囲に19本の綱をつなぎとめるのに19個の鉄の懸吊環（けんちょかん）を固定させた。（中略）

昭和19年2月から3月にかけて、一宮海岸から放球された実験気球は、約200個に達したという。

昭和20年2月艦載機来襲、B29による京浜地区空爆、3月10日の東京大空襲等で工場は被災し、一宮は基地として機能しなくなり、勿来とともに大津に合流して残りの風船爆弾を放球して終わった。（後略）」

全国の生産個数はおよそ1万発。このうち9,300発が放球された。

アメリカで確認されたのは361発である。プルトニウム製造工場（ハンフォード工場、ワシントン州リッチランド）の送電線に引っかかり短い停電を引き起こした。作戦が終了していた1945年5月5日、オレゴン州ブライで不発弾に触れたピクニック中の民間人6人（女性1人と子ども5人）が爆死した。²⁵

6.まとめにかえて

・高知県の紙生産は、もともと民生用が中心での昭和に入ってから土佐和紙は「謄写版原紙用紙（雁皮紙）・タイプライター原紙（楮紙）などの工業紙世界的な評価を得て、大量に輸出された。」（いの町紙の博物館の展示）。大東亜戦争の開戦で、輸出の道がとざされ、土佐和紙業界の仕事が戦争の進展の中で軍隊用に傾いていき、ついには、風船

²⁴ 千葉県の一宮町役場のホームページの「風船爆弾」

http://www.town.ichinomiya.chiba.jp/kankou/shoukai/60/415.html?searched=%E9%A2%A8%E8%88%B9%E7%88%86%E5%BC%BE&highlight=ajaxSearch_highlight+ajaxSearch_highlight1 2012年12月15日閲覧

²⁵ 吉野(2000),PP247-259

爆弾の気球づくりで対外侵略のため兵器づくりがメインになった。このことは土佐和紙業界の産業のモラルを問われる汚点となった。明治以来の天皇制の侵略戦争への動員、思想攻勢のなかでも、高知県では、かつては侵略戦争反対の運動も活発だった。しかし、業界には、もはや、これに抵抗する精神はなかった。いや、戦争で輸出の道が閉ざされ窮地にあった業界は、積極的に、これ協力している。ここに土佐和紙の産業としての問題点がある。城東安芸製紙有限会社で生紙をすいていた小松富代さんが、戦後、「兵器だから作れませんとは絶対言えなかった。ただ一生懸命やるしかなかった」としたうえで、「私が作った和紙の爆弾が使用され、誰かが亡くなりでもしたら」と、考えると今でもゾッとすると語っている²⁶が、この感情こそ人として当然のものではないだろうか。

写真 6 輸入から大東亜戦争開戦、風船爆弾づくりへの流れ



(出所) いの町紙の博物館の展示から

²⁶ 「いま問う平和'11 夏 風船爆弾 家計を支えるため製造 『兵器は作れぬ』 逆らえぬまま 安芸の小松富代さん(85) 悔しさ今も」、毎日新聞「高知」 2011年8月18日付

・青年・中年の男性が兵隊にとられ高知県でも極度に労働力が不足していたが、軍部、行政は、その作業に多くの主婦、若い女性、高等女学校の生徒、学校の生徒、国民学校の児童などをかりだしたことも県民の苦痛を増大させた。データはないが極度の低賃金であったと思われる。動員された高等女学校の生徒たちの賃金はもらわなかったという証言もある。業界は大儲けしたと思われる。

・この間、製紙業界の発展に欠かせない高知県紙業試験場の研究も軍事一色になった。「...業界各方面の支援の下に発足した県立紙業試験場も、大東亜戦争勃発直後の熾烈[しれつ]な戦の渦中に巻き込まれて、試験場独自の研究が阻害されたのみか、昭和十九年[1944年]には陸軍兵器行政本部が此处[ここ]に置かれ、更[さら]に大阪陸軍需品廠駐在官の配置を見る等、全く軍国一色に塗りかへられた為[ため]に、研究の自由を束縛され皮肉の嘆[ひにくたん]の嘆[たん]のことが。功名を立てたり手腕を発揮したりする機会のないのを嘆くこと]をかこたなければならなかつた。²⁷」。山岡茂太郎氏によると、風船爆弾用の紙の生産が終了したあとは、科学加工紙本社工場でも、日本軍の特別攻撃用の紙の燃料タンクなどをつくっていたという。

・紙の生産が風船爆弾用に特化した結果、この間、民生用の紙が極端に少なくなった。風船爆弾の工場に動員されていた高知県立佐川高等女学校の生徒たちが「うれしかったこと」にあげているのが、生理のときのための紙がないなかで、動員先の工場でヤレの紙をもらえたことをあげている。それほど、民生用の紙はひっ迫していた。

・1945年8月15日の終戦後、占領軍の進駐に備えて科学加工紙本社工場は急きょ壊された。²⁸しかし、風船爆弾の気球づくりの経験を通じて、高知県の紙業界は権力の命令と庇護のもとに生きるというくせをつけてしまった。それは、戦後も引き継がれる。山岡茂太郎氏によると、高知の紙工場は、いままで納めていた陸軍の注文がなくなったため「戦後の復興にあたって」、山岡氏をGHQ（連合軍最高司令官総司令部）本部の紙業課に行かせ典具帖紙輸出再開を陳情させる。山岡氏は、風船爆弾の気球づくりは「軍の命令でやっていたので...」と弁明し、高知に来たGHQの担当者を饗応したうえ、典具帖紙のタイプライター用紙12000連の注文を得る。生産にあたって高知の紙業界は、県、警察の協力を得る。製品は、沖縄のアメリカ軍をとおして輸入された。しかし、このタイプライター用紙の輸出は、戦後4年で注文が途切れた。アメリカで、マニラ麻ですくタイプライター用紙が開発されたからだった。²⁹

こうした経験をくぐって高知の紙業界が、その後、どうなっていたかは、別の研究を待ちたいと思う。

²⁷ 清水編著(1956),P216-218

²⁸ 小林(1995),P53

²⁹ 山岡(2007),P83-90。タイプライター用紙12000連とあるが、1連は、14インチ(35.56センチメートル)の紙で500枚。いまでいえば1億2千万円ほどの受注だったという。

【参考文献】

- 1) 秋本実 『日本飛行船物語』光人社、2007年
- 2) 朝日新聞社高知支局編 『40年後の証言』土佐出版社、1986年
- 3) 猪野睦・岡林清水編 『高知文学 高知文学学校研究科作品集 第23号』高知文学学校研究科、1997年
- 大阪砲兵工廠慰霊祭世話人会 『大阪砲兵工廠の八月十四日 歴史と大空襲』東方出版、1997年
- 4) 岡田黎子 『大久野島 動員学徒の語り』毒ガス島歴史研究所、1989年
- 5) 生永利正^{あひながとしまさ} 『元高知市立高知高等女学校生徒勤労誌 幻の高等女学校』生永利正、1990年。
- 6) 「高知・20世紀の戦争と平和」編集委員会、高知・空襲と戦災を記録する会編集 『高知・20世紀の戦争と平和』平和資料館草の家、2005年。
- 7) 河野剛久 『私本土佐和紙物語』河野製紙株式会社、1992年
- 8) 小林良生^{よしなり} 『和紙博物誌 暮らしのなかの紙文化』淡交社、1995年
- 9) 櫻井誠子 『「風船爆弾」秘話』光人社、2007年
- 10) 自分史かわら版編集室 『いま「記憶の証言」送ります あの日8月15日』四国写植出版制作室、1988年
- 11) 清水泉編 『土佐紙業史』高知県和紙協同組合連合会、1956年
- 12) 鈴木俊平 『風船爆弾』新潮社、1980年
- 13) 戦争遺跡保存ネットワーク高知 『高知の戦争 証言と調査』第7号。平和資料館・草の家。2010年1月
- 14) 戦争遺跡保存ネットワーク高知 『高知の戦争 証言と調査』第8号。平和資料館・草の家。2010年6月
- 15) 戦争遺跡保存ネットワーク高知 『高知の戦争 証言と調査』第12号。平和資料館・草の家。2011年
- 16) 南国史談会編 『南国史談 第十二号』。南国史談会、1992年
- 17) 西沢弘順、朝日新聞高知支局 『土佐紙物語』高知県製紙工業会、1973年
- 18) 日本製紙パピリア株式会社高知工場 『高知工場史』日本製紙パピリア株式会社高知工場、2003年
- 19) 林えいだい 『女たちの風船爆弾』亜紀書房、1985年。
- 20) 林えいだい 『風船爆弾 乙女たちの青春 写真記録』あらき書店、1985年
- 21) ふるさとの今昔をさぐる子供と若人と大人の会企画実行委員会 『ふるさとのいまとむかし』ふるさとの今昔をさぐる子供と若人と大人の会企画実行委員会、1986年
- 22) 山岡茂太郎 『和紙と共に七十年 モタやんの大正・昭和・平成』飛鳥出版社、2007年
- 23) 山崎熊吉編 『五十年の歩み 創立五十周年記念刊行』土佐女子高等学校・土佐女子中学校、1952年
- 24) 吉永豊実 『蛭雪八十年』高知県立丸の内高等学校同窓会、1967年

25) 吉永義尊 『日本陸軍兵器沿革史』、1996 年

26) 吉野興一 『風船爆弾 純国産兵器「ふ号」の記録』朝日新聞社、2000 年

27) 『わが戦争体験の日々』編集委員会 『わが戦争体験の日々 往時を生きた 89 人の記憶』
高知ペンクラブ、2006 年